# 感想を書かせていただきます。

夏槿蝉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
感想を書かせていただきます。

【Ｎコード】
Ｎ９６７４Ｎ

【作者名】
夏槿蝉

【あらすじ】
「小説家になろう」で小説を投稿した私は偶々目に付いた小説にひたすら駄目だしをしてしまった。それは果たして良いことだったのだろうか？

ある日、私は『小説家になろう』というサイトに小説を投稿してみた。ちょっとした恋愛小説だ。昔の彼の視点から描いた話で、私の実力からしてみればそれなりに描けていると思う。勿論、プロと比較するほど自惚れているわけではないし、まだまだ足りていない部分があるのも分かっている。それでも、誰かに見て欲しくなって投稿してみたのだ。多分、投稿する瞬間は夜中だったせいもあり興奮していたのだと思う。一気呵成にサイトの登録から投稿まで行うと、全ての力を使い果たしたように寝込んでしまった。

翌日、昼間は友達とデパートでショッピングしていたから、家に帰ってきたのは夜中だった。何気なくサイトにアクセスしログインしてみると感想が書かれているとのメッセージが。あまりの嬉しさにバレリーナのようにくるくるっと回転して喜びを表現してしまった。ただ、その後、目が回り気持ち悪くなったのが少しダサかったのだけれども。

感想の返事を書いてから私は他の人はどんな小説を書いているのかと疑問に思った。今まで、自分が書くことばっかりで、人が書いたものには興味が無かったのだ。

特に深い意図は無い。本当に単なる興味本位だった。偶々、連載している小説で更新された最新のものをクリックしてみた。

『美少女だからって俺に首輪をつける権利はないはずだ！』って題名のやつだ。

本来ならばこの時点で気づくべきだ。こんな題名の物は間違いなく碌でもない代物であると。でも、その時はとりあえず読んでみてから考えようと思ったのだから仕方がない。何にせよ、私はブラウザに羅列されている文字を読み始めた。

そして、まず感じたのが酷い冒頭だった。『俺って不幸だ』って文から始まっている。この瞬間に典型的な素人による駄作じゃない

かと感じた。私はその時点でブラウザの戻るボタンを押すべきだった。それでも、その時は最後まで読んでから内容を判断するべきだと考えたので、我慢して読み進めることにした。

誤字、脱字は当たり前、推敲したのか疑いたくなるような子供が書いたような文章だった。しかも、あまりの描写の少なさに場面をイメージすることが出来ない。表現自体も漫画から抜き出したかのような稚拙さ。漫画ならば絵があるが、小説には無いのだから、読者に分かるように説明しなくてはならない。作者が読者のことを意識しながら小説を書いているのか、私は非常に疑問に感じた。

最後に一番気に入らなかったのが、ご都合的なストーリーだ。ライトノベルというものを良く知らなかったのでこのような内容を見たことが無かったのだが、調べてみるとハーレム系と言うらしい。女性を単なる物として書いている。もっと分かりやすく言うならば、これでは単なるセックスアピールとして女性を登場させているにすぎない。本物のライトノベルであればハーレム系でもしっかりと描かれているのだろうが、目の前のはあまりにも世界観にしろ首輪というガジェットにしろ適当でいい加減で投げやりだ。しかもキャラクターの性格すら一貫性がなく作者の都合で動かされているのが丸分かりだ。この書き手は読者の視点で文章を書くという意識が間違いなく欠落している。

苛ついていた私は、冷蔵庫に入っていた梅酒を持ってきて、飲みながら感想を書き始めた。懇切丁寧にひとつずつ指摘をしていく。

感想欄の悪かった点に、元々の文章と同じくらいの長さで駄目だしをする。この手の感想を書いたときに誤字脱字があるととてつもなく説得力を失うので、三回ほど文章を読み直してから送信をした。完璧だ。反論できるものならやってみな。

ふと時計を見ると夜中の三時を回っていた。翌日が日曜日で休みといえども夜更かしのしすぎだ。美容にも良くない。芋虫のようにもそもそと動いてベッドに横たわる。自分では気がついていなかったが疲労がたまっていたのだろう。羊を数える暇もなく朝になって

いた。

いや、起きたのは、朝というよりほぼ昼だった。長い髪を後ろに束ねてゴムで止める。長い息を吐くと自分の口臭の酷さに気分が悪くなってくる。慌てて洗面所に向かい、丁寧に顔を洗ってから念入りに歯を磨く。

ひとまずすっきりしたところでお腹が空いてきた。今日は出かける用事もないし、急いで化粧をする必要も無い。だから食欲を満たすべく、朝食の準備に取り掛かる。トーストと目玉焼き、コーヒーを準備してからテーブルに移動した。トーストを一口かじるとイチゴジャムの芳醇な香りと甘みが口の中に広がっていく。五臓六腑に染みていくと言っては大げさだろうか。だが、今の私にとっては体中が幸福感に包まれていくような感触だった。目玉焼きの白身部分を箸で掴み口に入れる。適度な塩味が淡白な白身部分を引き立たせている。自分自身で料理の才能に自画自賛しながらコーヒーを飲んでいると、パソコンが動作していることに気がついた。

マウスを指で軽くつつくとスクリーンセーバーが解除されて昨日の感想が画面いっぱいに広がる。我ながら良くここまでぼろくそに書いてしまったと少しだけ後悔しながらもリロードする。すると、画面のスクロールバーが長くなっている。何事が起こったのかと思って目玉焼きの黄身を食べながらマウスを移動させると反論が書いてあるではないか。

私は画面を目で追った。作者は想像していたのより遥かに高度な思考を持った人間であったのかと内心畏怖していた。しかし、すぐにそれが勘違いであることを理解した。

言い訳に終始している。それが第一印象だ。実際、恥ずかしい言い訳の羅列であった。その部分は表現として妥当であるとか、伏線になっているから読者が分からなくても仕方がないとか。挙句の果てに、これでも読者は満足しているから問題ないとの逆切れにしか受け取ることが出来ないことが書かれているのを見て、心底呆れてしまった。

しばし呆然とした後、ふつふつと言いようのない怒りが腹の底から湧き上がってくる。そのエネルギーを糧として、世界観やキャラクターの一貫性から句読点や単語の選択に関してまで、まさしくフルボッコの勢いで指摘しまくる。これでぐうの音も出るまいというほど書ききった頃にはいつの間にか外は暗くなっていた。

送信ボタンを押してから多少書きすぎたかなと後悔するところもあったが、夕食のカップラーメンをテレビを見ながらすすりつつ、梅酒の缶を二つほど空けているうちにすぐに忘れてしまっていた。あまり面白くないお笑い芸人に対して無理やり笑うのに飽きた頃、翌日が月曜日であるという当たり前の現実がのしかかってくる。いい加減現実逃避することが出来る年齢ではないと、明日のために休養することにしてお風呂場へ向かう。

ゆっくりと入るお風呂は美容にも精神的にもいいもの。単なるユニットバスだが、そんな狭い場所でも私にとっては大事な場所。アロマテラピーの原液を湯船にたらすと不思議な模様を描きながら溶けていく。シトラスの安らぎの匂いを感じながら、お湯の表面に手を触れさすとちょうどいい湯加減だ。普段穢れている部分を丹念に洗ってから湯船に浸かる。大きな声で流行りの歌を歌い終わる頃には十分身体が温まっていた。湯船から出て汚いものを全て洗い流すと、生まれ変わったような気がする。リラックスしたお風呂には精神を回復させる何かがあるのだろうと考えながらバスタオルで身体を包む。顔の手入れをしなくては。と考えながらタオルの下に下着だけをつけて鏡の前に向かう。

髪を乾かしたから後は寝るだけ。そう考えながら、ふとテーブルを見るとスクリーンセーバーが動いている。電気代の無駄だと考えながらマウスに触れると、先ほどの書き込みが現れた。まさか反論など無いだろうとリロードするとまたもやスクロールバーが伸びた。

半分、嫌気が差しながらも画面を見る。画面は謝罪の言葉で埋まっていた。コピーペーストとはとても思えないほどの書き込みだ。見ているこちらが段々と寒気がするような言葉が画面を占有してい

く。途中で何回もブラウザを閉じようかと考えたことか。それでも、最後まで読むのが私の義務であると考えると憂鬱ながらも我慢するしかない。

これだけで、小説になるのではないかという書き込みを最後まで忍耐強く視認していく。所々、文章がおかしくて理解が出来ない部分もあるが、ようやく最後までたどり着くと少しだけ達成感が沸いてくる。しかし、最後の一文を見た瞬間にそんな気分は全て失われてしまった。陰鬱で残酷なものが私の心を蝕んでいく。頭の中におぞましい蟲の卵が気がめいるほど沢山撒かれたことを察して意識が遠くなっていく。

それでも今更時間を戻すことは出来ない。書き込みを削除することが出来たとしても、作者の魂は汚泥物のヘドロの中に埋まってしまったのだ。

ああぁ、どうしてこんなことをしてしまったのだろう。書いてしまったのだろう。反省することしか出来ないのだろうか？　私は必死に考える。少しでも罪滅ぼしを行えることを……。

そして、思いついた。そうだ。感想を書こう。それが、感想を書いて人を苦しめた私の罰だ。と。勿論、望まれない人に八つ当たりで書くのではなく、望んでいる人に向かって。それに、私の基準を決めよう。激甘から激辛までの。感想を書かれる人が苦しまないように。

ねえ、ここの感想欄に、激辛、中辛、普通、甘口、激甘の評価基準の希望と、評価して欲しい作品を書いてくださいませんか？

そうすれば、評価基準に従って書かせていただきます。

感想を。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9674n/

---

感想を書かせていただきます。

2010年10月8日13時57分発行